

莊鳥經春只越吟
窣堵波原難作宅

菜根滋味憶山林
磨兜堅已自題箴

夕陽千樹鳥声寂
惟余結習殘書在

涼月一庭花影深
窺見羲皇以上心

【読み】

莊鳥（そうせき）春を経て ただ越を吟ず 菜根（らいこん）の滋味 山林を憶（おも）う
夕陽（せきよう）千樹鳥声寂（しづかに涼月（りょうげつ）一庭（いつてい）花影（けいえい）深（ひし）
窣堵波（そつとは）原（もと）より宅（たく）を作（な）し難（がた）く 磨兜堅（まとうけん）
すでに自（みづか）ら箴（しん）を題す 惟（ただ）余（あま）す結習（けつしゅう）殘書（ざんしょ）在（あ）りて 窺（く）見羲皇（ぎこう）以上の心

【意味】

莊鳥（そうせき）は春を経ても、なお越の国の歌を吟じている。菜の根の素朴な味に、山林の生活を懐かしむ。**夕陽の中、千の樹々の間で鳥の声は静まり、涼しい月の光の下、庭の花影が深く沈んでいる。**窣堵波（窣堵波）には本来、俗人の家など建てられなくて、修行者の磨兜堅（まとうけん）はすでに自ら戒めの言葉（箴）を刻んでいる。ただ自分に残るのは、かつての習慣と、残された書物ばかり。だがそれらを通じて、古代の聖人・伏羲よりもさらに上にある真理の心を、ほんのわずかにでも感じ取ることができるものだろうか。

*莊鳥：春秋時代、楚の音楽家。越に亡命した後も故国楚の歌を吟じ、郷愁の象徴とされる人物。*菜根：野草の根
*窣堵波：仏塔 *磨兜堅：修行者 *結習：前世または過去の行為・習慣の名残 *羲皇：伏羲氏。古代中国の理想の聖王。

【出典】秋山学圃為張韋齋明府題（清・李紱） 秋山学圃（しゅううざんがくほ）張韋齋明府の為（ため）に題す
李紱が、秋山学圃という人物（＝張韋齋明府）に題した詩